



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

## <シンポジウム>近世前期の東地中海：オスマン帝国・ヴェネツィア間の条約体制と商業特権

著者	堀井 優
雑誌名	関学西洋史論集
号	43
ページ	21-28
発行年	2020-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10236/00028523">http://hdl.handle.net/10236/00028523</a>

# 近世前期の東地中海

——オスマン帝国・ヴェネツィア間の条約体制と商業特権——

堀 井 優

## 1 オスマン条約体制の展開

東地中海（レヴァント）の近世（16-18世紀）は、その大半がオスマン帝国の支配下にあった時代として特徴づけられる。13世紀末にアナトリア西北部に出現したオスマン国家は、14・15世紀にアナトリア・バルカン・黒海沿岸部を征服した後、1516・17年にマムルーク朝領シリア・エジプト・ヒジャーズに領域を広げ、16世紀前半にはイラク・イエメン・ハンガリー・アルジェリアにも拡大するとともに、地中海・紅海・バルシア湾における海上権力を強化した。こうしてキリスト教世界に対して攻勢に立ち、またアラブ地域の大半を包摂したオスマン帝国は、東地中海およびその周辺を支配しつつ、ヨーロッパ全体に対峙するようになる。その対外的優位は16世紀中葉から徐々に弱まるが、拡大傾向は17世紀まで続き、また18世紀末までその広域的統合と対外的自立性は基本的に維持された。

オスマン帝国と西方との関係のなかで特殊な立場にあったのが、ヨーロッパの一部でありつつ東方と深い関わりを有したヴェネツィア共和国だった。ヴェネツィアは、13世紀から東方各地に築いた属領や拠点からなる「海上領」の大半を、15世紀中葉から17世紀中葉にかけてのオスマン領の拡大にともなう数度の戦争によって奪われた。しかし中世以来の東方貿易を継続し、コンスタンティノーブル（イスタンブル）・ダマスクス・アレクサンドリア等がオスマン支配下に入った後も、これらレヴァント諸都市で組織されたヴェネツィア商人の居留集団を維持した。また16世紀以降は、オスマン臣民のユダヤ教徒や

トルコ系ムスリムの商人を本国に受容していた。それゆえヴェネツィアとオスマン帝国との関係は、和戦両様かつ密接不可分だったといえよう。

オスマン帝国は、平時の友好と貿易を秩序づけるために、ヴェネツィアから派遣された使節と交渉のうえ、君主の名においてアフドナーメ (ahdname [条約の書]、capitulations) を発布して相手側に与えた。ヴェネツィアへのアフドナーメは、クレタ戦争 (1645-69 年) 開始までの 16 世紀・17 世紀前半には少なくとも 14 回にわたって、新君主の即位にともなう条約の更新や戦争終結のための講和などを目的として与えられた。これらの文書では、両者が地理的に近接し、かつ和戦両様の関係にあったことを反映して、陸上の領域、海上の秩序、両者間を越境する人間移動に関する諸条項が設けられ、またいわゆる「商業特権 (commercial privileges, imtiyāzāt)」に相当する、オスマン領内のヴェネツィア人の処遇 (居留・活動条件) に関する諸条項が設けられた。これら対ヴェネツィア規定は、オスマン帝国が領内のキリスト教徒集団や属国を保護し、また遠近のヨーロッパ諸国と友好を結ぶために、それぞれの相手にアフドナーメを与えることによって形成された条約体制の一部をなしていたと考えられる。

ヴェネツィアへの一連のアフドナーメは、原則として一定の形式を維持し、発布されるたびに従来の規定の大半を継承しつつ、若干の規定を追加・修正された。それゆえこれらの文書は、オスマン・ヴェネツィア関係における持続と変動の両面を反映する。その内容を分析すると、近世前期の両者関係は二つの段階に区分できる。まず 16 世紀前半には、比較的多く見られる規定の追加・修正をつうじて、オスマン優位とヴェネツィア人保護にかかわる諸原則が確立された。すなわち一方では、海上におけるオスマン側の主導権とヴェネツィアに対する規制が強化され、また 1537-40 年の戦争の終結時には新たにオスマン領となった土地およびヴェネツィア側の貢納金支払義務が明記された。しかし他方でオスマン領内のヴェネツィア人については、彼らの権利が拡大される傾向が認められる。とりわけ現地社会で生じる利害を調整する手段だった裁判に関する規定では、イスラーム法廷でヴェネツィア人を非ムスリムのオスマン臣

民に対して不利にしないための条件が整備された。したがってヴェネツィア人は、オスマン社会で現地住民と同程度の権利を享受するようになった。こうして確立された諸原則は、16世紀中葉・後半および17世紀前半をつうじて維持された。この時期にも若干の規定が追加・修正されたが、いずれもその主旨は既存の規定の補強にあった。とりわけ16世紀末以降は、オスマン・ヴェネツィア双方の行政機構の広域的な連携をつうじてヴェネツィア人の保護を図る規定が見られるようになる。以上の二つの時期区分をふまえ、近世前期の東地中海における秩序形成の観点から、それぞれの時期に対応する問題を以下に論じてみたい。

## 2 マムルーク朝商業特権の包摂

16世紀前半は、オスマン・ヴェネツィア関係の諸原則がアフドナーメで確立されるとともに、その適用範囲がシリア・エジプトに拡大した時期だった。それゆえ従来マムルーク朝下でヴェネツィア人が享受した商業特権が、どのようにオスマン条約体制に包摂されたかが問題となる。

そもそも商業特権の起源は中世後期に遡る。11世紀以降の地中海商業の隆盛にともなってイスラーム圏に進出したヴェネツィア・ジェノヴァ・カタルーニャ等のヨーロッパ商人に対して、ムスリム諸王朝はイスラーム法上の被安全保障者（*musta'min*）の地位を与えて領域内に受容し、安全に居留して順調に活動するための条件を整備していった。ヨーロッパ商人の居留と活動の条件は、多くの場合、本国が派遣する使節とムスリム君主との交渉によって定められ、ムスリム君主が発布する勅令（*marsūm*）に記されて領域内の諸官吏に周知された。

さしあたりマムルーク朝末期・オスマン支配最初期エジプトのヨーロッパ人にかかわる勅令およびそれに準じる合意文書を検討した限りでは、ヴェネツィア人はオスマン条約体制におおむね順調に包摂されたと思われる。なぜならオスマン帝国とマムルーク朝のいずれも共通の規範にもとづく規定を設けてお

り、また 16 世紀初頭に現れたマムルーク朝規定の一部は、同時期のアフドナーメで追加された規定の一部と原則的に符合していたからである。このような現象は、もともと商業特権が王朝の枠を超えた普遍性を有しており、それゆえオスマン帝国によって統合され体系化されえたことを示唆しているように思われる。

実例を海上秩序について見ると、自領の沿岸海域のみを規定の対象としたマムルーク朝文書と、オスマン・ヴェネツィア間の海上空間全体に及んだアフドナーメとの違いにもかかわらず、両国の規定には一定の共通性があった。例えばマムルーク朝には、ヴェネツィア人とは異なる集団 (*tā'ifa*, *nation*) に属するヨーロッパ人による略奪行為のために、領内のヴェネツィア人が捕虜の買い戻しを強制されないとする規定があった。このような集団間の連帯責任の禁止は、アフドナーメに見られる、友好国の艦隊・船舶と敵対者のそれとを明確に区別する規定と共通する規範だったように思われる。またマムルーク朝では、友好相手の船を略奪した人間はスルタンによって処罰されるとする規定があったが、オスマン帝国でも 1521 年のアフドナーメで、ヴェネツィアの艦隊や船舶を襲った「盗賊」や不正規兵は、ヴェネツィア人によって捕虜にされれば、オスマン君主によって処罰されるとする規定が追加された。

次にマムルーク朝およびオスマン帝国の領域内のヴェネツィア人の処遇について見ると、例えばマムルーク朝は、ある商人の債務を、同じ集団に属する別人に課してはならないことを規定していた。このような個人間の連帯責任を禁止する規定は、オスマン帝国でも 1513 年のアフドナーメで、商人およびバイロ (*bailo*, *baylos* イスタンブル駐在領事) のために追加された。また現地社会で生じる利害を調整する裁判については、マムルーク朝とオスマン帝国との間で規定の仕方は異なるが、主旨は共通していた。前者はイスラーム法廷のみならず海港の総督やカイロのスルタンに判決を求める権利を認め、後者は 1513 年および 1521 年のアフドナーメで、前述のように、イスラーム法廷での判決のさいにヴェネツィア人を不利にしないための規定を追加した。それゆえ両国とも、ヴェネツィア人の利益を考慮していたといえよう。

マムルーク朝およびオスマン帝国の領域内で組織されたヴェネツィア人集団を代表する領事もしくはバイロについては、両国とも関連規定を設け、そのなかで集団としての一定の自律性を認めていた。領事やバイロに与えられた自集団管理のための最も基本的な権利は、集団内の問題について現地権力の介入を受けずに行使する排他的な裁判権（領事裁判権）だった。また現地で死亡した商人の遺産について、イスラーム法の相続関連規定を適用されず、領事もしくはバイロが管理することも認められていた。さらに16世紀初頭には、ムスリム権力の領事およびバイロへの不介入のみならず、支援と統制を明確にする傾向も見られた。マムルーク朝では1515年に、領事がヴェネツィア人を服従させるためにカーディー（イスラーム法裁判官）の支援を得るとする規定が現れ、オスマン帝国でも1502年から、許可なしで他の土地に行こうとするヴェネツィア人を、バイロがスバシュ（警察長）の援助を得て阻止できることが規定されていた。またマムルーク朝ではやはり1515年に、領事がスルタンの勅令やイスラーム法による以外は拘束されないとする規定が現れた。その主旨は領事の権威の尊重であるが、勅令によって拘束されうる点で、スルタン権力の優越も示されているといえよう。アフドナーメでこれに相当する規定は見出せないが、1521年に追加された、バイロ自身のかかわる争いは君主の御前会議で聴聞されるという規定は、スルタン権力の優越という原則において、マムルーク朝規定と共通する。このような領事・バイロへの支援と統制の明確化は、16世紀にオスマン・ヴェネツィア間の結合的關係が形成される過程の端緒だったように思われる。

### 3 バイロ・領事網の形成

オスマン・ヴェネツィア関係の結合性は、16世紀末にアフドナーメで反映されるようになった。1595年に修正されたある条項は、「盗賊」等によってヴェネツィア領の島で捕虜にされ、オスマン領内で奴隷として売却された人間について、その奴隷がムスリムに改宗していれば解放され、非ムスリムのままで

あれば「ヴェネツィアのベイ（貴族）たちのバイロたち、あるいは代表者たち、あるいは代理人たち」に引き渡されることを規定した。また別の修正条項は、イスタンブルその他の諸商港で「古来の慣習」より多額の関税が要求されている問題について、「古来の法」にしたがって勅令が発せられ、現地に駐在するバイロおよび領事（konsolos）がその勅令を保持することを規定した。この二つの条項は、オスマン行政の主導とヴェネツィア行政の関与の下で、オスマン領全般にわたるヴェネツィア人の保護が図られている点に特徴づけられる。こうした行政上の広域的連携は、オスマン領の拡大にともなって設置された諸州における支配体制の確立と、ヴェネツィアの伝統的な東方行政の再編によって成立したと考えられる。この後者の側面は、「ヴェネツィア領事網」の発展として理解されうる。

16世紀初頭の時点でヴェネツィアは、オスマン支配下のイスタンブルにバイロを置き、またマムルーク朝支配下のダマスカスおよびアレクサンドリアに領事を置いていた。バイロ・領事は、任地のヴェネツィア人集団を管理し、またヴェネツィア人の利益のために現地政権と交渉した。こうした外交・行政上の仕組みは、オスマン帝国によるマムルーク朝領併合以降も継続しつつ、変化し発展することになる。領事の駐在地は、16世紀中葉にシリアではアレppoに、エジプトではカイロに移った。またバイロと各地の領事の間で連絡関係ができるとともに、バイロの中心的機能が高まった。例えば1520年代から、ヴェネツィア人がエジプトで直面した問題（主にユダヤ教徒との対立・競合）について、領事から連絡を受け、あるいは領事の報告にもとづく本国政府からの命令を受けたバイロがオスマン宮廷と交渉し、ヴェネツィア人に有利な勅令を発布してもらう事例が繰り返された。また1588年にヴェネツィア元老院は、新設されたキプロス・ボスニア・アルジェの領事その他の領事と同様に取り扱われるよう、バイロがオスマン政府の命令を得ることを定めた。

16世紀に現れたバイロの中心的機能は、その後の集権化につながったと思われる。バイロが各地の領事を管理する範囲は、近世をつうじて拡大した。1586年の時点でバイロが管理していたのは、マルマラ海のシリヴリおよびバ

ンドゥルマ、ダーダネルス海峡のゲリボル、エーゲ海のイズミルおよびキオス、そしてロードスの領事であり、これらのうちイズミル・ゲリボル・シリヴリ・バンドゥルマの領事はバイロによって任命されていた。クレタ戦争終結後の1670年に元老院は、バイロが新設のアテネおよびクレタ領事をも任命することを定めた。とはいえ17世紀末までアレppoおよびカイロ駐在領事は、バイロと同様に大議會によって選出され、貴族でなければならず、自集団内で裁判権を有していた。しかし18世紀にはバイロのみが貴族から選出され、アレppoおよびカイロの領事には非貴族が任命されるようになった。それゆえバイロは、オスマン領全域のヴェネツィア人集団の長として裁判権を有するようになったと考えられる。

以上を要するに、近世前期とりわけ16世紀にオスマン・ヴェネツィア間の条約体制の枠組が確立され、その枠組のなかで中世以来の商業特権を支える広域的な行政上の仕組みが形成され、それは近世東地中海における秩序形成の一部となったといえるだろう。

#### 参考文献（史料と研究）

- Frantz-Murphy, Gladys, "Negotiating the Last Mamluk-Venetian Commercial Decree (922-3/1516-7): Commercial Liability from the Sixth/Twelfth to the Early Tenth/Sixteenth Century," in Frédéric Bauden and Malika Dekkiche (eds.), *Mamluk Cairo, A Crossroads for Embassies: A Studies on Diplomacy and Diplomatics*, Leiden and Boston, 2019, pp. 741-781.
- İnalçık, Halil, "İmtiyâzât, ii," *Encyclopaedia of Islam*, new ed., vol. III, Leiden, 1971, pp. 1179 a-1189 b.
- İnalçık, Halil, and Donald Quataert (eds.), *An Economic and Social History of the Ottoman Empire, 1300-1914*, Cambridge, 1994.
- Korkut, Besim (Basım Qırqūt) (ed.), *Arapski Dokumenti u Državnom Arhivu u Dubrovniku (al-Wathā'iq al-'Arabīya fī Dār al-Mahfūzāt bi-Madīna Dūbrūwnik)*, vol. I, part 3, Sarajevo, 1969.
- Moritz, Bernhard, "Ein Firman des Sultans Selim I. für die Venezianer vom Jahre 1517," in G. Weil (ed.), *Festschrift Eduard Sachau*, Berlin, 1915, pp. 422-443.
- Pedani, Maria Pia, "Gli ultimi accordi tra i sultani mamelucchi d'Egitto e la Repubblica di Venezia," *Quaderni di studi arabi*, vol. XII (1994), pp. 49-64.



- , “The Oath of a Venetian Consul in Egypt (1284),” *Quaderni di studi arabi*, vol. XIV (1996), pp. 215-222.
- , “Consoli veneziani nei porti del Mediterraneo in Età Moderna,” in Rosella Cancila (ed.), *Mediterraneo in armi (secc. XV-XVIII)* (*Quaderni-Mediterranea: Ricerche storiche*, vol. IV), vol. I, Palermo, 2007, pp. 175-205.
- , *Venezia porta d'Oriente*, Bologna, 2010.
- Sanuto, Marino, *I diarii*, 58 vols., Venice, 1879-1902, repr., Bologna, 1969-1970.
- Theunissen, Hans, “Ottoman-Venetian Diplomats: The ‘Ahd-Names. The Historical Background and the Development of a Category of a Political-Commercial Instruments together with an Annotated Edition of a Corpus of a Relevant Documents,” *Electric Journal of Oriental Studies*, vol. I, no. 2 (1998), pp. 1-698.
- Tuchscherer, Michel, and Maria Pia Pedani, *Alexandrie ottomane*, vol. I, Cairo, 2011.
- Wansbrough, John, “A Mamluk Ambassador to Venice in 913/1507,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. XXVI (1963), pp. 503-530.
- , “A Mamlūk Commercial Treaty Concluded with the Republic of Florence 894/1489,” in S. M. Stern (ed.), *Documents from Islamic Chanceries*, Oxford, 1965, pp. 39-79.
- , “Venice and Florence in the Mamluk Commercial Privileges,” *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*, vol. XXVIII (1965), pp. 483-523.
- , “Imtiyāzāt, i,” *Encyclopaedia of Islam*, new ed., vol. III, Leiden, 1971, pp. 1178 b-1179 a.
- 堀井優「条約体制と交渉行動——近世初頭のオスマン権力とエジプトのヴェネツィア人領事——」林康史編『ネゴシエーション——交渉の法文化——』（法文化（歴史・比較・情報）叢書 6）国際書院、2009 年、157-176 頁。
- 「16 世紀オスマン帝国の条約体制の規範構造——ドゥブロヴニク、ヴェネツィア、フランスの場合——」『東洋文化』第 91 号（2011 年 3 月）、7-24 頁。
- 「オスマン帝国のエジプト征服とアレクサンドリアのヴェネツィア人——1517 年セリム 1 世の勅令の部分的再検討——」近藤信彰編『近世イスラーム国家史研究の現在』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2015 年、95-105 頁。
- 「16 世紀後半・17 世紀前半オスマン帝国—ヴェネツィア間条約規範の構造」川分圭子・玉木俊明編『商業と異文化の接触——中世後期から近代におけるヨーロッパ国際商業の生成と展開——』吉田書店、2017 年、689-717 頁。
- 「東地中海のオスマン帝国とヴェネツィア人」岸本美緒編『1571 年 銀の大流通と国家統合』（歴史の転換期 6）山川出版社、2019 年、176-208 頁。